

幸せな贈り物



「幸せ伝道者」の 幸せではない死

去っていく文章 その方
はいつでも思いきり幸せだ
と
思っていました。10月7日、
聞こえてきたチェ・ユンヒ夫

婦の心中のニュースは、多くの人々が衝撃を受け心を痛めました。何がその方たちの人生をそのようにさせたのでしょうか。

私たちは幸せに生きていました。小さな事にも感謝して、熱心に最善をつくして生きてきました。ところが、2年前からあちこち、からだから警戒警報が鳴りはじめました。力に比べて、あまりにも多くの事をしていたので、バッテリーが放電したのだと言われました。2年間、入退院を繰り返しながら、とても疲れてしまいました。それでも感謝して希望を握ろうと努力しました。ところが、秋夕の前の週に、肺に水がたまったという医師の宣告。呼吸するのが大変で、救急室に入って、もう一度の絶望的な宣告。そして、再び今度は心臓に異常が生じました。これ以上、入院して点滴をいっぱいぶら下げて生きたくはなかったのです。一人で去ろうと海南の地の果ての村に行き、睡眠薬を飲んだのですが、夫が救急車を呼んで、追跡して見つけにきました。私は痛みがひどすぎて耐えることができなくて、夫はそんな私を一人で送ることはできなくて…それで、いっしょに行くことにしました。ホテルには本当に申し訳ございません。赦してくださいと、何度も赦しを求めます。とても善良な夫、すまなくて、また、すまないだけです。今まで私を信頼してくださり、愛してくださった多くの方々に申し訳なく本当にごめんなさい。しかし 700 種の痛む病気に苦しんだ方なら、私の心を少しは理解してくださるだろうと思います。すべての方々にもう一度、申し訳ありません。

2010. 10. 07.

平凡な家庭主婦だったチェさんは三十八歳だった1985年に、1330対1の競争率をくぐって、現代グループ主婦公募に合格、広告会社コピーライターに変身しました。二十二歳で会った夫の事業失敗のため、仕方なく始めた社会生活でした。そのように始めた社会生活は、人生を完全に置き変えました。元気に動きまわる若い人があふれる広告会社で、それも男女差別がひどい時代に、四十歳のおばさんは泣いたり、たくさん苦しんだのですが、現代放送の広報局長に栄転しました。チェさんは、ある放送プログラムで「主人が事業に失敗しなかったら、そのまま専業主婦で生きた」と言いながら「事業失敗で大変だったが、社会生活をするようにしてくれた夫が今はとても感謝で、毎日、毎日、感謝状をあげる」と言いました。外為危機以後の1999年、五十二歳の年に辞表を出しました。自分が出れば、若い人三人くらいはもっと働くことができるという考えからでした。引き続き大韓民国の主婦たちに力を与えてあげるためにエッセイ「幸せ、それいくらですか」という本を出しました。反応はまさに爆発的でした。梨花女大校誌の編集長出身らしい文才と大韓民国のおばさんの元気な話し方で、放送はもちろん、大学、企業、軍、警察など相次いでくる講演要請に引っ張り出されました。チェさんが講演や本で一番強調した言葉は「自分をありのまま受け入れて幸いを作っていく」というものでした。きれいではない外見のため、自ら「あざみ、苦菜、イヌヤフシソウ三種混合人間」と呼びながらも「みにくいこと、貧しいこと、無学なのは罪ではない。罪はたった一つだ。熱心に生きない罪」と言い切りました。この時から

彼女には「幸せ伝道者」、「幸せデザイナー」という修飾語が付きまといました。

そんな彼女も2年余りの闘病生活の前では、それ以上、幸せではなかったようです。チェさんは遺書に「点滴をぶら下げて生きたくはなかった。……700種の痛む病気に苦しんでみた方なら、私の心を少しは理解してくださると思います」と書きました。ご主人との心中については「私は痛みがひどすぎて耐えられず、主人はそんな私を一人で送ることができなく、それで一緒に行くことになった」と説明しました。チェさんは、難治性の珍しい病気で免疫体系に異常が生じ、全身に炎症反応を誘発する病にかかっていました。キム・ジョンウ、キョンヒ医療院精神科教授は「慢性化した痛みから来るストレスが人に及ぼす影響を決して軽く見てはいけない」と「自殺は衝動的な場合ではないなら、痛みに対する無気力症から出るうつ病である可能性がすごく高い」と言いました。

生かす文章 それなら、人間の本当に幸せは、はたしてどこで見つけなければならないのでしょうか。ある方は「彼女の伝えた幸せが真価を発揮しようとするなら、自分の病気さえ幸せの一部で受け入れなければならなかった」と切なく言いました。そして「まことの幸せは

神様から与えられるだけで、世の中での幸せは一時的で限界があるということを経験したことが残念です」と言いました。チムシン大学相談大学院ユ・チェソン教授は、交通事故で3度やけどをして11回の手術を経験して絶望と自殺の衝動に勝って「希望の証拠」になったイ・チソンさんなどを例にあげて「キリスト教の歴史は、とうてい生活を続けることができない状況でも、命を保っているのちの花を咲かせたたくさんの人々でいっぱいだ」と言いました。ユ教授は「今もガン病棟に行ってみると、苦しみの中で熾烈に死と戦っているのちの花を咲かせる人々が多い」と「このようなキリスト教の生命力がもっとたくさん伝わって、社会の中に潜在している『死に至る病気』を一日もはやく清算しなければならない」と強調しました。

ある日、だれにも突然にやって来る、避けることができないのろいと災い。人間の力でどうしようもないその何か。人々はこれを運命、定めだと言います。はたしてそうでしょうか。魚が水の中に、鳥は空の中で、木は地の中に根をおろして生きなければならぬのに、神様とともに生きると本当の幸せを味わうように創造された人間の創造原理。しかし、暗やみの勢力(サタン)にだまされて創造原理を脱して、神様を離れたあと、人間にやって来た暗やみの人生のシナリオ。自分も分からなくサタンの支配を受けながら、理解することができない霊的問題と運命がもたらす偶像崇拝の苦しみ、名前も分からない不安とむなしさ、不眠症とうつ病、背景も良くて、知識も多くて、お金も多いのに押し寄せる虚無感とさまよい、結局、出会うしかない肉体の病気と苦しみ、その中で繰り返される失敗と死んだ後に行かなければならぬ地獄の永遠な裁き、そして、仕方なく子どもの胸に残していかなければならぬ霊的な遺産と傷…。これが、サタンという暗やみの勢力がもたらす人生の不幸なシナリオです。

はたして、人間自ら解決することができるのでしょうか。それで、神様は人間の問題を解決してくださいと救いの道を開いてくださいました。私たちが罪人であった時に「キリスト」を送って人間の罪を負って十字架で死んで復活することで、サタンの権威を打ち破って、すべての罪とのろいを解決して、神様に会う道を開いてくださいました(ヨハネの手紙第一 3:8、マルコの福音書 10:45、ヨハネの福音書 14:6)。この方がすなわち、キリストであるイエス様です。だれでもキリストとして来られたイエス様を信じて受け入れれば、直ちに神様の子どもになります。この時、はじめて人間には聖書に約束されたすべての神様の祝福と本当の幸せが始まるのです。最高の幸せのストーリーは、人生のすべての問題の解決者であるイエス・キリストとともにすることです。

「あなたは大切な人です」

わたしはあなたがたのために立てている計画をよく知っているからだ。——主の御告げ——それはわざわざではなくて、平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ。(エレミヤ 29:11)



幸せをさがすあなたに・・・

誠実 まじめに最善をつくして生きてきた人がいました。親から受け継いだ財産が全然なく、自分の努力で底辺からはじめて、休みなく走って来て、ある程度、安定した基盤を成すようになったのですが、ある日、健康の問題が来て、仕事をすることも、自分のからだを自ら責任を負うこともできなくなったのです。「こんなになるつもりで、前だけ見て必死に走って来たのではないのが…」とりとめなく、多くの考えが頭を押さえつけて、痛い体をもっと苦しめるばかりです。

善行 だれも認めるしかないほど善良で正しく生きている人がいました。自分や家族が余裕をもって生活できる状態ではないのに、彼は彼と関係なく一人暮らしのお年寄りと孤児の家をお金や物質でだけでなく、息子のようになり、叔父のように、そのように仕えて整理してあげる人間味あふれる愛の持ち主でした。ところが、ある日一瞬にしてひき逃げ事故にあって、一人しかいない息子は意識不明状態に陥り、本人も脊椎をひどくけがをして、将来歩いて通うことができるか疑われるそんな状態になりました。彼を知っているすべての人が心を痛めて、くやししく地団太を踏みました。口を固く閉ざしていたのですが、彼の心にもどうしようもない考えが押し寄せてきました。「私がなにを間違ったのか…。欲もなく、心から貧しい隣人の面倒を見て、恥ずかしくないように生きようと努力したのに…」

成功 ひとりの青年がいました。幼い時から首席を逃したことがないエリートの中のエリートでした。最高の大学の有望な専攻で認められる実力で博士の学位まで受けて未来が保障される研究所の研究員で、だれが見ても前途有望な青年でした。ところが、ある日、恐怖と息苦しさが入り込んで来て、自分を捕らえてしまい、正体もわからない、ある暗い存在の前に何も集中することができない状態に陥るようになりました。病院へ行ってみて、薬を飲んで、カウンセリングも受けて、療養もしてみたのですが、とうてい他人との関係も難しく、職場生活も維持することができなくなってしまいました。

私たちのまわりで一度くらいは聞いたことがある、そんな話です。人生は、努力したとおりに、苦労したとおりに、施したとおりに、心に決めたとおりに、数学の公式のように正確に計算できて、予測可能な事だけ起これば良いのですが、そうではないということはだれも認めるしかない現実です。

幸せ 熱心にまじめに生きること、正しく善良に生きること、お互いに信じて奉仕しながら生きること、夢を向けて挑戦しながら努力することなどは、人生を幸せに生きて行くのに、常識で基本で普遍的なことであって、窮極的な解答や目標はなりません。それらは良いことですが、聖書で語っている人生の根本問題である神様を離れた問題や罪の問題、サタンが与える霊的問題を解決することはできないからです。それで、そのように熱心に生きたのに、ある日、やってくるのろいと災いをふせぐことはできないのです。この問題を解決するために、神様は一つの道を私たちにくださいました。その唯一の道がイエス・キリストです。罪のないイエス様が十字架で死んで復活されることで、神様を離れた私たちに、神様に会う道を開いてくださり、私たちが解決することができない罪をすべて許してくださり、サタン、悪魔の権威を完全に打ち砕いて勝利されて、私たちの救い主になってくださったのです。だれでも、このイエス様を自分の救い主として信じて受け入れれば、神様の子どもになって、運命やさだめから出てくるようになります。

これこそが神様が私たちに与えられた唯一の幸せの道、救いの道です。

神様の子どもになる 受け入れの祈り

愛の父なる神様、私は罪人です。今まで神様を離れ、サタンの支配の下に縛られて、奴隷のように生きて来ました。

しかし、今、この時間、イエス様を私の救い主、私の神様、私のキリストとして受け入れます。

イエス・キリストは、神様に会う唯一の道であり、サタンの権威を打ち砕かれ、すべての罪とのろいと災いから私を解放してください。くださったキリストであると信じます。

いま、私の中に入って来てくださり、私の主人になってください。

今から私の生涯を細かく導いてください。

イエス・キリストのお名前によってお祈りします。アーメン

神様の子どもの 毎日の祈り

父なる神様、イエス・キリストによって神様がいつも私とともにおられて、導かれることを感謝します。

今日も、すべての生活の中で、神様の子どもになった祝福を味わうように、聖霊で満たしてください。

私の家庭と現場と行くところごとに福音を邪魔して困らせるすべてのサタンの勢力を権威あるイエス・キリストの御名で縛ってください。

どんなこと、どんな問題でも、解決者であるイエス・キリストに任せて、その中で神様のより良い計画を発見しながら、聖霊に導かれる生活になりますように。

そして、私の生活を通してイエス様がキリストであるということがあかしされ私の現場に神の国が臨むようにしてください。毎日、私の生活の中で神様の願いである世界福音化の契約を握って勝利できますように。今も私とともにおられるイエス・キリストのお名前によってお祈りします。アーメン

秋のベンチで

いまはどのアパート団地でも町内でも、かなりの所では小さな公園がある。それほど、生活の質が向上しているという証拠だ。幸せを味わう権限が国民すべてに公平に分けられているという感じだ。その一つのコーナーベンチに座って秋を眺める。落ち葉で覆われた席だが、まだ残っている昼の暑さと朝と夕方の肌寒さが、その反動で少しは物寂しく思われる。ベンチに長く座って、季節の奥深い循環を考えると、分らなくて過ぎ去る時間だが、ふと創造主の存在を確認するようにしてくれる。永遠からはじまった春の白くて清い青さが、紅葉に染まって行く日が年をとっていくことを感じさせるが、経験することができなかった新しい日々に対して期待するようになる。

しかし、普通の人々が簡単に思う季節の意味、特に秋の趣が必ず浪漫とはならないようだ。このごろは季節の喜びよりは、その重さにくたびれる精神の負担が加重されるからか、秋症候群だとか、秋のうつ病だとかいうことが普遍的に言われている。もちろん、社会的欲求が充足されることができない現実の問題が反映されているとも言えるが、生活の自由を忘れてしまった現代人の実際とも見える。

ベンチウォーマー(Bench Warmer)という言葉がある。野球の補欠選手を称して言うことばであるが、攻撃や守備に投入されることができないままベンチを守って相手の選手にやじを飛ばして、仲間には応援を送る人々のことだ。ベンチウォーマーというのは、すなわち座っている椅子ベンチ(bench)を暖かくする人(warmer)ということばが合さったことばだ。結局、長い間、席に座ってその席を暖める人という意味で、本流に入ることができなかった人々を称するのだ。もし自分を見る時、このように主流に入ることができなかった部類の人が自分だと、自ら認める人がいるかもしれない。主導的な人生になることができずに、何かに引っぱられるような愚かさに自分が縛られていると思う言葉だ。



イラスト—キム・ジョン

しかし、よく人間の世の中を見れば、大部分の人がそのような状況を脱することができないことが分かるようになる。元々、人間は自らの選択で自由を永遠に味わうことができる存在だったが、自由を誤って使ったことで、正確に言えば、欲に導かれて、自由を放縦したことで永遠に自由を逃した。ある面で見れば、現代の人間は歴史の水車で、いくらあがいても主導的人生として用いられるには、本当に足りない人であるしかない存在だ。それで、与えられた人生のくびきを脱することができないまま、その席にとどまって固まって動くことができず、結局、席だけ暖める人になってしまったのだ。だから、宗教は変えることができないその席を偶像化させ、倫理は暖かい姿勢を正しく維持するように指導した。

しかし、福音はどんな状況からも立ち上がりなさいと言う。そして歩きなさいと言って走りなさいと言う。これ以上、席にとどまっているのではなく、そこから出なさいと言う。できない存在だから、福音をくださったし、それを単純に信じなさいと言う。隣りのために席を暖めて認めてもらうつもりでないなら、ベンチから立ちあがろう。座って考えることは悩みだが、立って考えることは瞑想だ。詩が書けない暖かいベンチは夢を与えないから、秋の趣を考えていずに、立ちあがって歩いて秋の生活を考えよう。

チョン・ヒョングク牧師(福音コラムニスト)

*相談したい方はこちらまでどうぞ